

# 由岐町阿部地先のメガイ、マダカアワビについて

天真 正勝

由岐町阿部地先の漁業は海士漁業への依存度が高く、ほとんどの漁業者が同漁業を営んでいる。漁獲対象はクロアワビ、メガイアワビ（以下、メガイと言う。）、マダカアワビ（以下、マダカと言う。）、トコブシ及びサザエであるが、1997年の貝類漁獲量（以下、メガイ、マダカの2種は同一銘柄として出荷されているため、メガイ・マダカと言う。）に占める割合はそれぞれ20.4%、11.5%、20.1%、48.0%である。また、生産金額では47.9%、19.6%、19.7%、12.8%であり、メガイ・マダカはクロアワビに次いで高単価である重要種となっている。このメガイ・マダカの再生産を維持するため、阿部地区では同種の漁獲殻長下限が徳島県漁業調整規則に従い9 cmであったが、1992、1993年の両年にわたり資源管理型漁業推進総合対策事業の一環である地域重要資源調査を実施した結果、毎年漁獲殻長下限は0.5cmずつ引き上げられ、1992年から1995年の4カ年で11cmに至っている。

本報告は、この資源管理効果を評価するための追跡調査を行ったものである。

## 調査方法

殻長組成調査は、阿部漁協の水揚げ場において、漁期中の7～9月にかけて水揚げされたメガイ・マダカについて両種を判別しながら、殻長をパンチカードに穿孔し、後日読み取り作業を行った。歴年の漁獲量は同漁協からの聞き取りによるものであり、過去15年平均値を100とした指数処理を施した。

## 結果及び考察

### 1) 殻長組成調査

1992～1996年のメガイ、マダカの測定数及びマダカの占める割合を表1に示した。

表1 1992～1996年のメガイ、マダカの測定数及びマダカの割合

年	メガイ	マダカ	マダカ/(メガイ+マダカ)(%)
1992	185	82	30.7
1993	313	113	26.5
1994	171	42	19.7
1995	129	24	15.7
1996	226	44	16.3

測定総数は年により異なるが、マダカの割合は1992年に30.7%であったが、徐々にその割合は低下し、1994年以降は20%以下となっている。

殻長組成をそれぞれ図1及び図2に示した。メガイの殻長のモードは徐々に大型化し、1996年は12.5～13cmとなっている。マダカについては測定個数が少ないが1996年ではメガイより大きい13.5～14cmとなっている。メガイアワビの殻長範囲の下限は、ほぼ自主規制の範囲にあり、同規制が遵守されているものと思われる。しかし、マダカの比率の低下は1989年に足ヒレの使用解禁により深所での操業が可能になったため、漁獲圧が高まっている恐れがある。

阿部地区における海士漁業の漁獲量について1982～1996年の15年平均値を100とした指数の推移を図3に示した。クロアワビは漸減しており、ここ数年は低い水準で経過している。メガイ・マダカは1990、1994年のような突出した年もあるが、1995年が最低となり1996年はやや上向いている。トコブシはクロアワビ、メガイ・マダカとは逆に1991年以降増加傾向にあり、高単価のクロアワビ、メガイ・マダカの漁獲減を補うため、トコブシへ転向したことが考えられる。サザエについては増減が大きく1986～1992年の間は過去15年平均以上

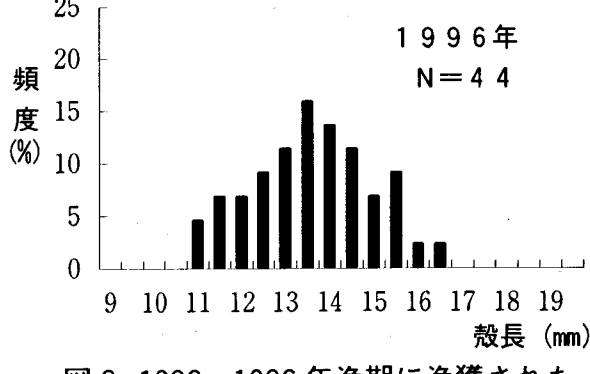
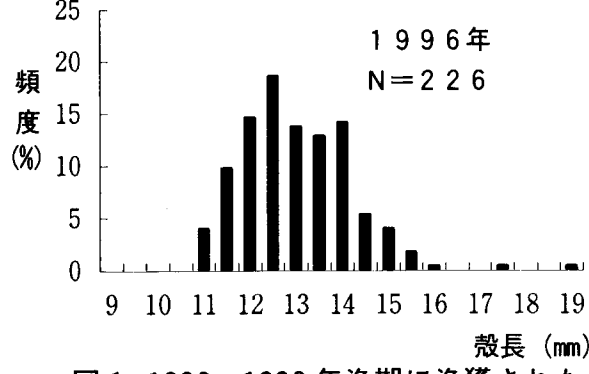
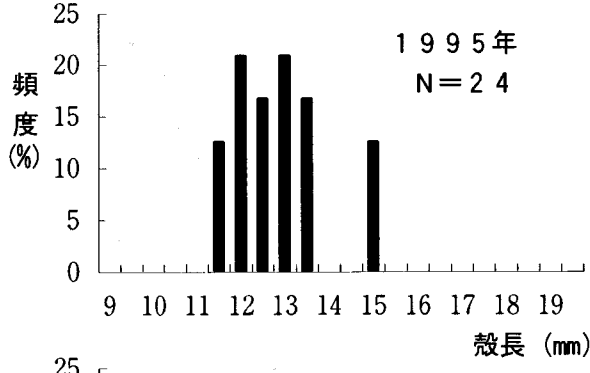
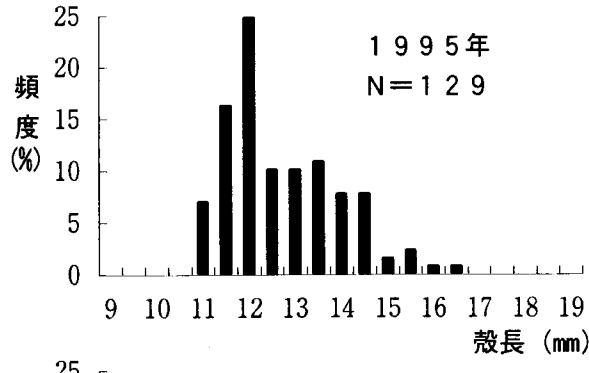
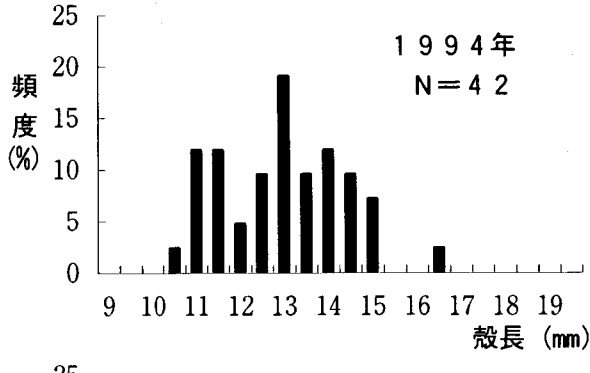
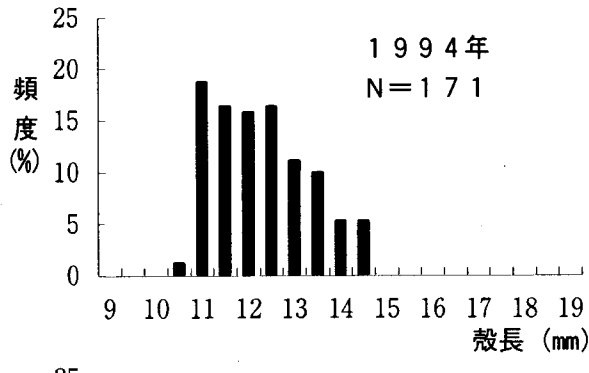
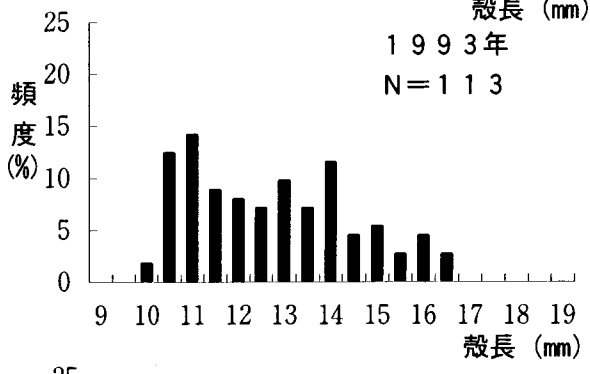
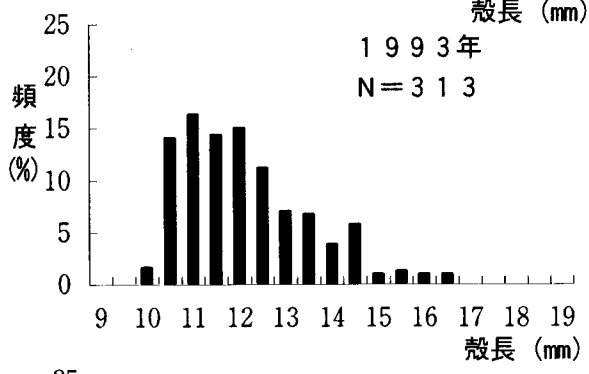
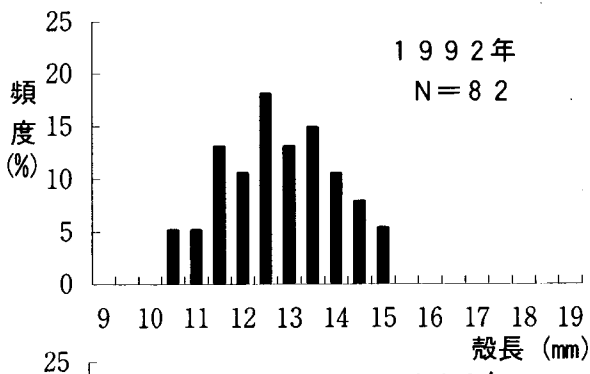
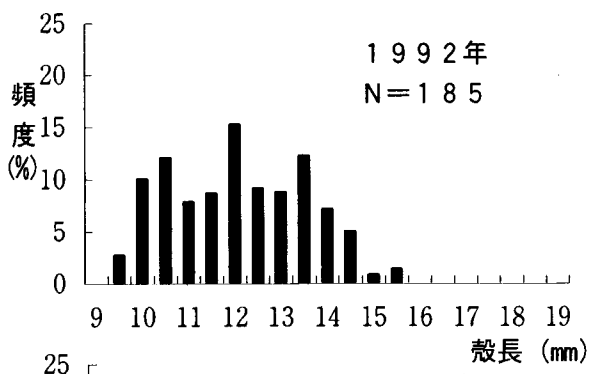
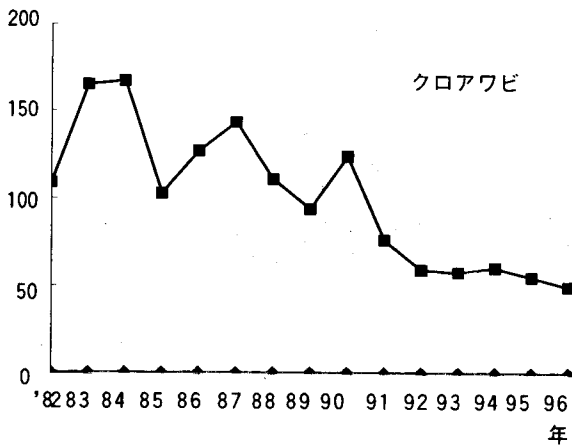


図1 1992～1996年漁期に漁獲されたメガイの殻長組成

図2 1992～1996年漁期に漁獲されたマダカの殻長組成



であったが、1993～1995年は低下し、1996年はやや回復している。

以上より、阿部地区においてメガイ・マダカは1995年に殻長下限を11cmとし、再生産及び漁獲増を図っており、やや漁獲量は増加したが、今後も追跡調査が必要と思われる。また、産卵母貝を確保するためには海部郡全体としての資源管理も望まれる。

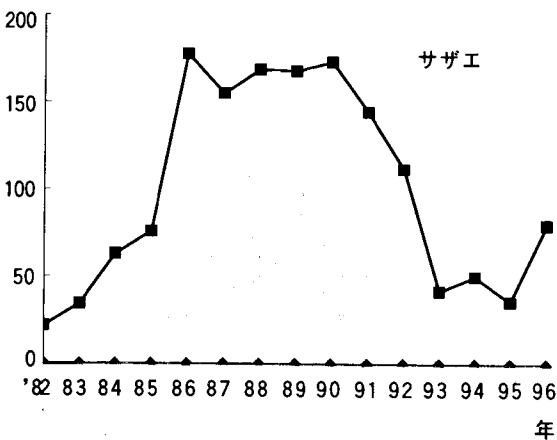
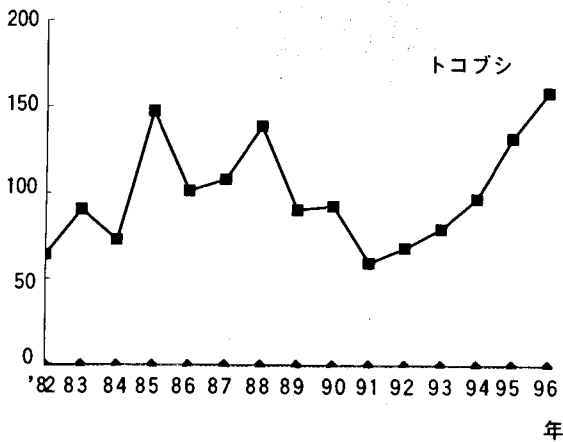
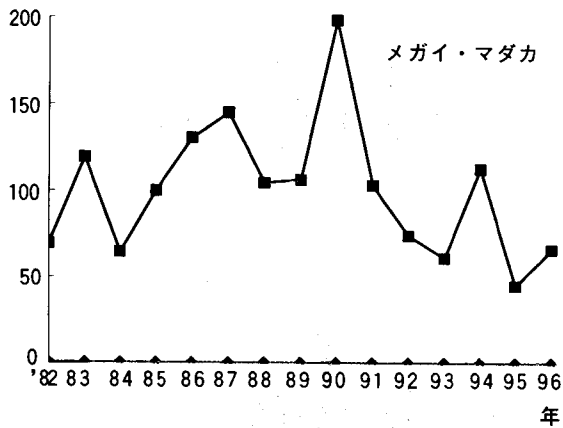


図3 阿部地区における1982～1996年の貝類漁獲量の推移